

## ＜ラウンドテーブル＞

### 第1会場「ダンス初心教員のための教材研究」

○提案者：高橋和子（横浜国立大学）

○設定趣旨

初心指導者に有効なダンス指導モデルとして、3人の熟練指導者のスタイル(①示範型、②言葉での誘導型、③課題提示型)を、実技を通して体験して頂く。

①示範型は、指導者が円の中に入り、自らが踊って課題を提示する。授業展開は「体ほぐしからリズムへ」→「動きを提示して自由に再構成する即興表現」であり、「授業の起伏と気分の流れや、誇張・動きのメリハリ・連続性」を重視し、内容に合った音楽を使用し1曲踊りきる方法を多用する。

②言葉での誘導型は、「言葉やイメージで動きを誘発」する方法で、「からだほぐし」→「素材提示・即興表現・発表」の展開であり、「声かけで技能やイメージを高めたり、歌や音楽を使用して表現世界へ誘うと共に、主体性を重視する」方法を取る。

③課題提示型は、「パターン化した動きの提示」をメインに、「からだ遊び」→「何気ない動き&即興」の展開であり、「自由な雰囲気の中、オノマトペで流れを創ること」を多用する。

○3人の指導方法は異なるが、共通点として、課題は明確であり、2人組を多用し、自由な雰囲気の中で、カウントで縛らず、即興表現を重視し、動きやイメージや個性を褒めて引き出すやり方である。これらの方法はダンス学習における導入段階に援用できるとともに、指導者自身の指導パターンを再確認できることにもつながると考えられる。

\*平成23-25年度科研費：基盤研究C「男女必修ダンスのモデル教授法開発—初心指導者に焦点化して」 高橋和子公式サイト<http://kazuko-ynu.jp>に映像公開

### 第2会場「小・中学校の体育活動における複数の指導者による効果的な指導の在り方」

○提案者：高橋るみ子（宮崎大学教育文化学部）

○設定趣旨

話題提供の目的は、複数の指導者（外部指導者と担当教員）による効果的な指導の在り方を参加者と議論することである。

そしてそれは、芸術家（外部指導者）を学校へ派遣し、その芸術家と教員が連携して、教科等（国語、体育、社会、総合的な学習の時間、他）に位置づけて、ワークショップ型の授業を実施する文部科学省事業（児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験）や、同じく学校へ芸術家を派遣する文化庁事業（文化芸術による子供の育成事業）の取組が動機となっている。

これらの事業を、体育（表現運動、ダンス）に位置づけた実践では、芸術家の「演示」や「鑑賞」の子供たちへの効果を認めることができた。一方、宮崎県では、武道の外部指導者を学校へ派遣し、その武道家と教員が連携して武道の事業を行い効果を上げている。オリンピックの東京開催を控え、今後は、スポーツ領域においても外部指導者の積極的な活用（演示や観戦）が図られることになろう。

そこで、次期学習指導要領における「観る」学習のカリキュラム化の観点から、外部指導者と教員による効果的な指導の在り方について、参加者と意見交換を行う。

### 第3会場「伝統的な動きを学ぶ柔道授業の提案ー抑え技の学習プログラムを考えるー」

○提案者：有山篤利（兵庫教育大学）藪根敏和（京都教育大学）・  
黒澤寛己（京都市立塔南高等学校）

#### ○設定趣旨

現在行われている一般的な柔道授業では、経験主義的な学習観が色濃く残っており、学習活動は競技に含まれる「技」の習得に集約され、その理解と高度化を目指した指導が展開されることが多い。抑え技の学習においても、けさ固めや横四方固めなどの「技」を個々の独立した技能として個別に習得し、完成することが主たる学習内容として焦点化されており、抑え技と（投げ技など）柔道に含まれる他の技能に共通する動きのエッセンスは何か、運動文化として抑え技の動きのどこに日本の伝統を見出すのかなど、教科体育として重要な視点は曖昧なままであった。

そこで本ラウンドテーブルでは、柔道の技能に共通する伝統的な動きを発見する運動学習として、特に抑え技の学習に焦点を当てた指導の実践例とその授業効果の報告を行いながら、学習内容の特定やその配列に関する検討、指導方法の工夫等について意見交換の場を持ちたいと考える。

### 第4会場「感じと気づきを大切にしたい体育授業の評価について～器械運動領域のアセスメントに視点を当てて～」

○提案者：永末大輔・古木善行・成家篤史・石塚諭・神崎芳明・濱田敦志・鈴木直樹・  
寺坂民明・田中勝行・神谷潤（体育カリキュラム研究会）

#### ○設定趣旨

本研究会では、現職教員と大学教員で協働研究を進めており、本学会ラウンドテーブルでは、広島大会に引き続き6度目の提案となる。これまで、体育の学びにおいて、運動そのものが有する「魅力」として動く「感じ」のおもしろさやそこから生まれる「気づき」によって子どもたちが運動の世界を拓けることの重要性を様々な領域における実践を通して提案してきた。本年度は、これまでの研究の課題を踏まえ、感じと気づきを大切にしたい授業における評価に注目し、実際の授業を振り返りながらその評価実践としての「アセスメント」の在り様について提案する。参会の方々との互いの評価観を共有しながら、体育授業における評価の在り方について協働的に議論し、新たな知見を探っていききたい。

### 第5会場「体育授業における「技能」の再検討ー構成主義的アプローチからの授業実践に向けてー」

○提案者：原祐一（岡山大学）・宮坂雄悟（川崎医療福祉大学）・松本大輔（西九州大学）

#### ○設定趣旨

体育授業へのアプローチの背景となる学習観には、様々な立場がある。その一つとして近年話題になっている構成主義的学習観がある。そうしたアプローチからの授業実践に向けて、ここでは「技能」の捉え方に着目したい。なぜなら、従来の技能は、「○○ができること」と捉えられることが多く、これはいわば行動主義的な学習観に基づいているからである。

構成主義的学習観にたった授業実践を検討していく際に、果たして技能の捉え方は従来のままでよいのだろうか。

そこで、本ラウンドテーブルでは、教科教育、心理学、社会学的なアプローチから体育授業における技能のあり方について話題提供した後、いくつかの具体的な領域において議論を深めながら合意形成をしていきたい。

## 第6会場「体育授業における教育内容・教材の順序構造とその構成方法について（3）－ラクロスの教材化を目指した授業実践－」

○提案者：竹田唯史（北翔大学）・後藤永行（北翔大学大学院修了）・佐藤亮平（北海道大学大学院教育学院）・近藤雄一郎（北海道大学大学院教育学研究院）・進藤省次郎（北翔大学非常勤講師）

### ○設定趣旨

体育科教育の中心的課題として、各スポーツの技術・戦術の指導が位置づけられている。この技術・戦術の指導については、これまで多くの研究や実践がなされてきている。しかし、依然として技術・戦術の内容・教材・方法の概念が曖昧で、それらを如何に構成して、すぐれた授業（わかる・できる授業）を作り上げていくかという方法論については未確立のままであると考える。

我々は、1985年頃より、スポーツの技術・戦術学習における教育内容（認識対象）・教材（習得対象）・教授方法・評価についての教授学的研究を進めてきた。第16回・第17回大会においては、我々の基本的な研究方法論について発表し、スキー、サッカー、フラッグフットボールなどの教育内容・教材およびその教授プログラムを提示することで議論を深めてきた。18回大会においては、「バレーボール」のオーバーハンドパス・アンダーハンドパス（レシーブ）などの基本的な技法の教育内容・教材構成について紹介し、実技を通して参加者の方々と議論を進めた。

今年度は、学校体育ではほとんど実施されていないラクロスの教材化に関する実践を報告する。

## 第7会場「体育教師教育における単元構造図の活用」

○提案者：佐藤豊（鹿屋体育大学）・日野克博（愛媛大学）・糸岡夕里（愛媛大学）・清水将（岩手大学）・梶ちか子（鹿屋体育大学）・大越正大（東海大学）

### ○設定趣旨

教師の実践的指導力を向上させるためには、1単位時間の授業計画の立案だけでは十分ではなく、単元全体を俯瞰することが必要と考えられる。指導と評価の一体化や教えそびれの防止という観点からは、「単元を見通してどのように授業を構想するか」、「単元のなかに指導と評価をどのように位置づけるか」といった単元を見通した授業づくりがなされる必要があり、これらを具現化するツールが求められている。本ラウンドテーブルでは、効果的・効率的な指導と評価を実現するために開発された単元構造図の作成・活用を体験しながら、新学習指導要領に基づく指導と評価の在り方について議論したいと思います。

## 第8会場「体育科を研究する研究組織の現状と課題」

○提案者：鈴木聡（東京学芸大学）・近藤智靖（日本体育大学）・内田雄三（白鷗大学）

○設定趣旨

若手教員の大量採用時代を迎え、教員の実践的力量形成は急務の課題である。小学校現場では、勤務をしながら研修を重ねる OJT が注目されている。そのような中、日本の教師文化の中で継承され、成果や手法が海外にも紹介される「授業研究」は、教師の実践的力量形成に大いに貢献してきた。教師は、「校内研究会」をはじめ、「官製の研究会」そして「民間の研究会」等に参加して実践的力量を形成している。しかし、近年の課題として研究内容の成果や運営方法の形骸化が指摘されている。また、採用人数が少なかったため若い教師が組織の中心となって研究を推進する立場になる現状があり、中堅期の教員の職能開発は重要な課題である。本ラウンドテーブルでは、そのような課題に焦点を当て、校内研究で体育を研究する意味を問い、教師が身につけるべき実践的力量とは何かについて意見交流をすることを目的とする。当日は、多角的な意見が出てくるように、ラウンドカフェ（ワールドカフェ）形式で行う。